

Y9-23

中央滅菌材料センターの業務の外部委託の現状と課題

岡山赤十字病院 看護部

〇三宅 尚美

【はじめに】安全な医療器械を提供することは、医療の質を保证するために重要であり、中央滅菌材料センターは、医療に使用する医療機器を適切に洗浄・滅菌を行い、安全な機器を提供するという役割をもつ。A病院は、病床数500床、診療科30科、救命救急センターをもち、急性期医療を担っている。手術件数は年間4900件である。中央滅菌材料センターは、手術室看護師長が兼務で管理を行っている。平成21年度から洗浄・滅菌業務の中央化を目的に作業部会を開始、平成22年度から業務の外部委託、平成23年度から部署での一時洗浄を廃止、中央化を行った。また滅菌物の管理を効率的に行うため、各部署管理から中央管理とし、払い出すことに変更した。外部委託への移行や物品管理の変更に伴う看護管理上の課題を明確にし、改善に取り組みたい。

【現状と課題】中央滅菌材料センターでは、院内使用の通常の医療機器を洗浄滅菌することに加え、手術器械のコンテナ化した物品の器械準備も行っている。業者から借用する専門性の高い機器類については、破損のリスクを回避するため、取り扱いについて周知する教育を行っている。看護師長は、日々のミーティングへの参加、管理日誌の報告を受け、業務の把握や問題解決を図っている。業者は手順書に従い業務を行っているが、多種多様な医療器械の洗浄・滅菌についての依頼や問い合わせについての対応はできていない。業務の変更に伴う手順書の修正や教育もタイムリーに行えていないのが現状である。滅菌の保証、洗浄・滅菌業務の質改善に積極的に取り組むためには、洗浄・滅菌工程の日常管理、滅菌物の管理、払い出しを適切に行う。また、委託業者の責任者との情報交換を密に行い、教育・指導を強化する必要がある。

Y9-25

効率的な手術患者受け入れの取り組み～手術器械セット化運用を試みて～

芳賀赤十字病院 看護部

〇小坂真裕美、金澤 靖子、三村久美子、梅原カツエ、塚田 則子

【はじめに】当院は手術室6室を有し、10科の予定及び緊急手術を行っている。さらに手術器械セットや院内の一部の診療器材の滅菌を受け持ち外来や病棟にも提供している。3月11日の東日本大震災では、特に水回りの配管と高圧蒸気滅菌器（以下AC器）に多大な損傷を受け、手術停止状態になった。AC器に関しては1ヶ月以上停止状態で、外注滅菌となり、十分な手術を受け入れることができなかった。緊急手術では限られたセットの中で工夫をこらし対応していくことは、看護師にとって大きな負担となった。そこで最低限の器械を用いて手術に対応できるように手術器械のセット化を検討した。一つの手術器械セットで多種類の術式に対応ができる器械セットを作成し、運用したことを報告する。

【目的】手術器械のセット化運用で効率的な手術患者の受け入れを図る。

【方法】各科部長医師と各科担当看護師で器械セット内容の検討を図り、手術器械のセット数の検討、各手術器械セット対応一覧の作成を行った。

【結果】手術器械を収納する手間が減り、器械組の時間が短縮された。また経験の浅い深いに関わらず手術器械セットを組むことが出来るようになった。さらに手術器械が効率良く使用されるようになったなど利点が多かった。

【おわりに】多種類の術式に対応できる手術器械セットを作成することで、効率的に手術患者の受け入れが出来るようになった。今後も手術環境を整えさらに効率的な手術患者の受け入れが出来るよう考えていきたい。

Y9-24

看護助手補助業務に看護学生のアルバイトを導入して

高松赤十字病院 看護部

〇岡田 諭子、安藤 幸代

【はじめに】新規採用者の獲得及び安定した急性期看護補助加算算定を目的とし、本年3月より無資格の看護学生を看護助手補助業務に採用した。臨床現場で組織の一員として働く機会は、実習とは違う視点での興味や関心を高め急性期病院の実態が理解でき、就職行動へのプラス効果や就職後のリアリティショック予防につながる。雇用後2ヶ月目に実施したアンケート結果から、現状及び今後の課題について報告する。

【結果】学生は「スキルアップ」「患者とのかかわり」など実習や将来に生かせる経験のみでなく、「病院の雰囲気」「夜間の業務」など臨床への強い興味・関心があり、就職も視野に入れた学びの場として期待感を持っている。また、時給への満足感や時間選択の自由性、職員の対応や看護の視点で指導が得られること等が、無理なく継続可能な働きやすい職場としての評価につながっている。職員は、「環境整備の充実」「至急業務重複時の対応がスムーズ」「入退院の多い日のベッド整備の効率化」「二人以上で対応する処置時のサポート」「検体や薬剤搬送等の対応の早さ」「不慮患者の見守り」など業務の負担軽減を実感し、「学生アルバイトに助けられている」と感じている。また、業務内容の明確化や業務一覧表の工夫、必要情報の伝達や積極的な声かけなど、学生が働きやすい環境を意識した取り組みがなされていた。

【課題】学生アルバイト導入は、職員の業務負担軽減につながっている。しかし、「時間の融通性」という学生にとってのメリットは、安定した人員確保ができないというデメリットになるため、個々の出勤状況や希望を考慮した配置換えやローテーションの工夫が必要である。さらに、ケア場面に参画する機会を増やすことで当院の看護への理解を深め、就職につながるよう工夫していきたい。

Y9-26

診療支援に看護補助者を活用する成果と課題

松山赤十字病院 看護部

〇後藤 美佳、増田 和子、森 由美子、上野めぐみ、泉 美恵子

【はじめに】外来の医師・看護師が本来の業務に専念できるよう事務的作業を整理・分担し、患者により満足できる医療を提供することを目的に、平成19年から看護補助者による外来業務アシスタントを導入した。（以下、診療アシスタントという。）今回、導入後の成果と課題を明らかにしたので報告する。

【活動内容と成果】診療アシスタントは、院内のことに精通している病棟の看護補助者を充てた。業務内容は、看護師免許を必要としない医師の診察介助、診察に必要な物品の準備と片付け、患者への簡単な検査・入院の案内等である。導入の評価として、外来を担当する医師・看護師にアンケートを行い、以下の成果が挙げられた。1. 医師は診療に専念でき、診察が円滑に進むようになった。2. 看護師は検査説明と看護処置や介助、生活指導に時間がとれるようになった。3. 緊急入院に関連する事務的処理の移行により、病棟搬入までの時間が短縮された。4. 看護師の昼休みの確保、時間外勤務の短縮に繋がった。

【今後の課題】30診療科のうち、現在は10診療科に診療アシスタントを導入している。在院日数の短縮化、患者の高齢化、日常生活援助の必要な患者の増加から外来医療・看護の役割が重要となり、診療アシスタントの増加と質の向上が求められる。今後、看護補助者に対する教育体制の整備、教育内容の充実を図る必要がある。